

播磨聖人 亀山雲平
—節宇亀山先生遺蹟之碑にみる雲平の思想と人柄—

中嶋裕子 中島友子

Kameyama Unpei, Saint Harima
— A Monument in Setsuu Kameyama Unpei 's Memory and His Virtue —

Hiroko NAKAJIMA¹⁾, Tomoko NAKASHIMA²⁾

Kameyama Unpei (1822-1899), who worked to build the foundation of Japan as well as the Harima area from the end of the Edo era to the latter part of the Meiji era, was called Saint Harima. He was a man of virtue.

Before the Meiji Restoration, he was a great scholar and a statesman of the Himeji clan. In his later life after the Meiji Restoration, he became a great educator, and it is said he had 3,000 followers. 16 years after his death his disciples raised a monument in his memory in Shirahama, Hyogo.

This paper examines the inscription on the monument, recognizes Unpei's achievements, and also introduces historical material concerning the monument that was found in the Tokura, Shikama, Himeji residence of Nakashima Hisakichi, who was one of Kameyama Unpei 's disciples.

Key words : Kameyama Unpei, monument in Setsuu Kameyama Unpei 's memory, educator, virtue

亀山雲平 節宇亀山先生遺蹟之碑 教育者 徳

はじめに

近畿福祉大学紀要第8巻第1号(平成19年6月)において、亀山雲平研究の今日的意義と雲平の生涯及び、雲平に関する新資料—中島久吉と中島正蔵へのはがき—について記した。

播磨聖人と尊敬され、門弟3,000人といわれる雲平であるが、関する資料が非常に少ない。明治の中頃、姫路に図書館を設立するに際し、雲平は多くの蔵書類を寄贈したといわれるが、この図書館は戦災で消失した。雲平

の使用していた教科書、著書、交友をものがある資料が非常に少なく、雲平の研究を困難にしている。

このたび現姫路市飾磨区都倉にある中島家において、文庫の中より、節宇亀山先生遺蹟之碑と節宇亀山先生墓碑に関する資料が発見された。節宇亀山先生遺蹟之碑に関する資料として、雲平の肖像と対になっている節宇亀山先生遺蹟之碑の全体像写真、碑文、碑の除幕式案内に対する亀山家からの礼状と故亀山節宇先生記念碑創立事務所からの封筒である。

1) 関西総合リハビリテーション専門学校 (Kansai Rehabilitation College) 〒656-2132 兵庫県淡路市志筑新島7-4

2) 近畿医療福祉大学 (Kinki Health Welfare University) 〒679-2217 兵庫県神崎郡神崎町高岡1966-5

節宇亀山先生遺蹟之碑は、雲平を敬慕した門人達により建立され、雲平の死後16年を経た大正4年7月6日（1915年）に除幕式が挙行された。除幕式挙行年月日は遺蹟之碑全体像の写真の記載より判明した。今年で93年になる。灘のけんか祭りを知らない人はいないが、松原八幡神社の祭りの隆盛にも寄与した雲平の多岐にわたる業績を知る人は少ない。今日、碑を訪れる人は殆んど無いのではないだろうか。

碑が建立された当時の中島家の当主であった久吉（1875－1940）は10代から20代前半に

かけて亀山雲平の弟子であり、雲平を敬慕していた。家人の話によると、久吉亡き後農地改革をはじめとする戦後の混乱に翻弄される中不運が続き、多くの貴重なものが失われたとのことである。そのような状況で、雲平の直筆及び雲平に関する資料が残ったことは、幸運であった。

本稿において節宇亀山先生遺蹟之碑と碑文を検証し、雲平の思想と人柄を読み解く。この度発見された中島家所蔵の碑文を掲載する。なお他の新資料は、次回検証する。

1. 節宇亀山先生遺蹟之碑

(1) 節宇亀山先生遺蹟之碑 全体像



写真1 遺蹟之碑全体像

写真1は、姫路市白浜町、松原八幡神社にある節宇亀山先生遺蹟之碑の全体像である（平成20年5月撮影）。碑は、台座を入れるとゆうに5メートルを越す高さである。碑の左側には寄進者名が刻まれた石柱がある。

(2) 碑文



写真2 碑文

写真2は碑文である。上部の額内には篆書で節宇亀山先生遺蹟之碑と書かれているが、その篆書の「節」の一部が欠落し、判読が難しくなっている。

(3) 碑の発起人名

[illegible]

図1 発起人氏名

図1は遺蹟之碑の裏に刻まれている発起人

名である。判読が難しくなっているが判読した部分のみ掲載した。尚、()は筆者による。

(4) 寄進者名が刻まれた石柱

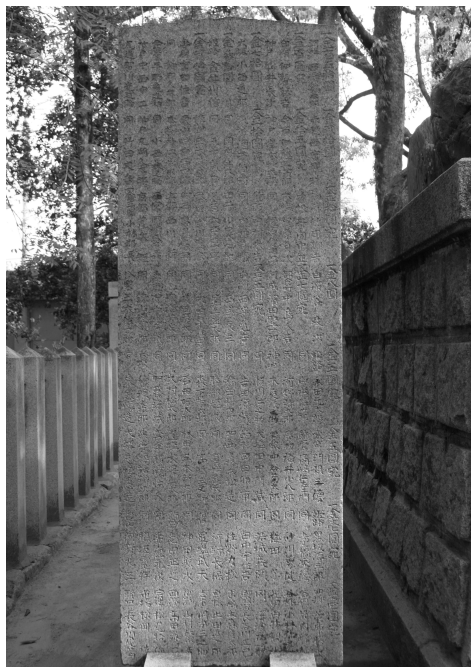


写真3 寄進者名が刻まれた石柱

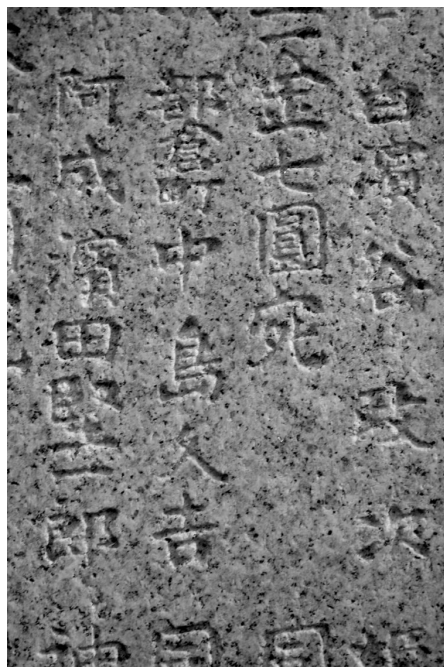


写真4 石柱の一部を拡大
中島久吉の名が刻まっている

遺蹟之碑の左横には、碑建立の寄進者名が刻まれた石柱がある。建立時から100年近く経った現在、判読が難しくなっている。しかし、正面全8段の内、4段目には「都倉 中島久吉」の名前が判読可能である。他に、同じく正面7段目には、「飾磨 志田正之」、裏面には、「飾磨 木下熊吉」の名前が見られる。亀山雲平から中島久吉に届けられた明治26年8

月31日付けのはがきに「木下志田之両兄江モ何卒右之趣御通報奉願上候」、明治26年9月17日付けのはがきに「右之段申上度何卒木下熊吉君へ御通報奉願候志田君へハ別ニはがき差出申居候」とあったが、文中の木下熊吉、志田は、石柱に見られる木下熊吉であり、志田正之ではないかと思われる。

2. 節宇亀山先生遺蹟之碑文

(1) 中島家所蔵の節宇亀山先生遺蹟之碑文

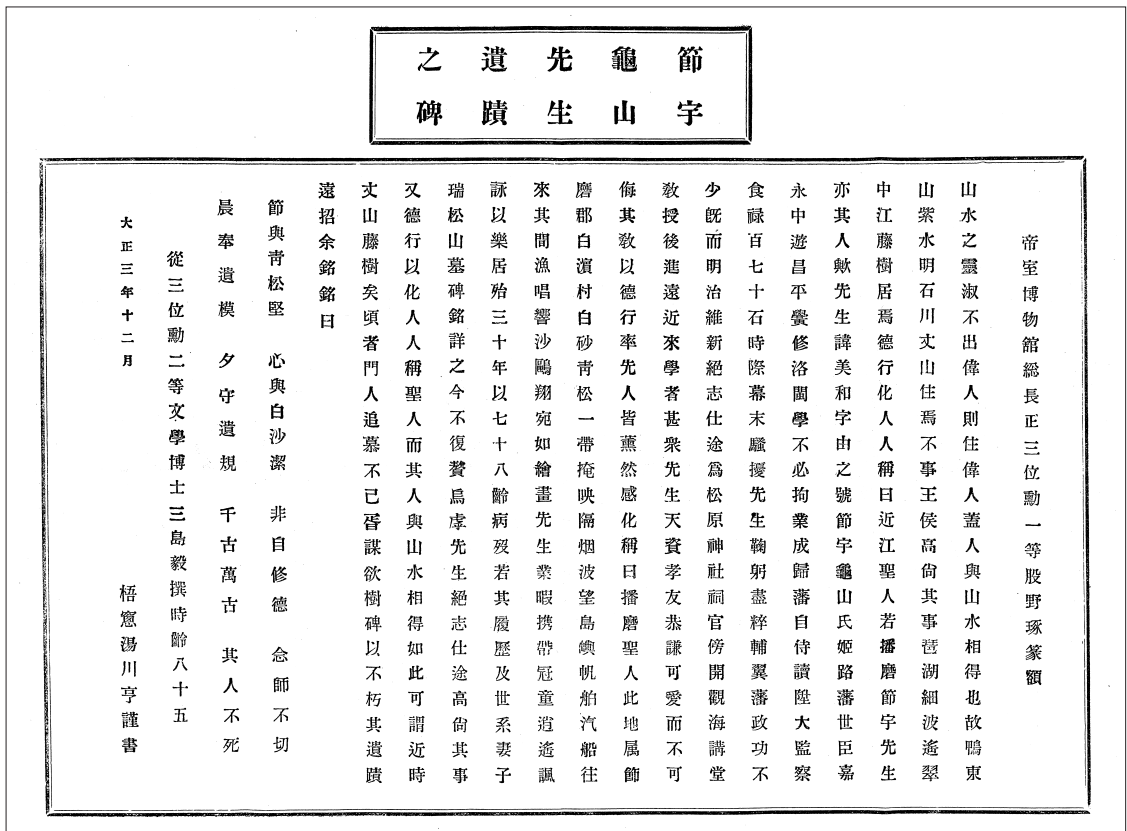


写真4 中島家所蔵の碑文

中島家所蔵の碑文は縦26cm 横36cm の紙に文字が印刷されている。それには「山水之靈淑不出偉人則住偉人蓋人與山水相得也」との漢字が使われていたが実際の節宇亀山先生遺蹟之石碑文には「山水之靈淑不出偉人則住偉人蓋人与山水相得也」とあり、下線の部分の使用漢字が異なる。同様に「心與白沙潔」は石碑文では与であり、「此地屬飾磨郡白濱村白砂青松一帶掩映」は沙である。(下線は筆者による) 額内は篆書ではなく楷書で印刷されている。

(2) 節宇亀山先生遺蹟之碑文 書き下し文

帝室博物館総長正三位勲一等股野琢の篆額

山水の靈は淑たり。偉人を出ださずんば、
 則ち偉人を住ましむ。蓋し人は山水と相得る
 なり。故に鴨東は山紫水明にして、石川丈山
 焉に住む。王侯に事へず、其の事を高尚とす。
 琵琶湖の細波は遙翠にして、中江藤樹焉に居り。
 徳行人を化き、人稱して近江の聖人と曰ふ。
 播磨の節宇先生のごときも亦其の人なるか。
 先生諱は美和、字は由之、節宇と號す。亀山
 氏は、姫路藩の世臣なり。嘉永中昌平覺に遊
 ぶ。洛閩の學を修むるも、必ずしも拘らず。
 業成りて藩に歸る。侍讀より大監察に陞る。
 食祿百七十石。時に幕末の騷擾に際ひて、先
 生鞠躬尽瘁し、藩政を輔翼す。功少なからず。
 既にして明治維新仕途に志すを絶つ。松原神
 社の祠官と為り、傍ら觀海講堂を開き、後進
 を教授す。遠近より来たりて學ぶ者甚だ衆し。
 先生の天資は孝友恭謙なり。愛すべくして侮
 るべからず。其の教へは徳行を以て率先す。
 人皆薫然として感化せられ、稱して播磨の聖
 人と曰ふ。此の地は飾磨郡白濱村に属す。白
 沙青松にして一帯は掩映せられ、烟波を隔て
 て、島嶼を望む。帆船汽船其の間を往來す。
 漁唱響き、沙鷗翔ぶ。宛も繪畫のごとし。
 先生業暇に冠童を携帶し、逍遙諷詠し以て楽
 しむ。居ること殆ど三十年、七十八齡を以て
 病歿す。其の履歴及び世系妻子のごときは、
 瑞松山の墓碑銘之を詳らかにす。今復た贅ら
 ず。烏摩、先生仕途に志すを絶ち、其の事を
 高尚とす。又徳行以て人を化く。人聖人と稱
 す。而して其の人山水と相得ること此くのご
 ときは、近時の丈山・藤樹と謂ふべし。頃者
 門人追慕して已まず、胥謀りて碑を樹て
 以て其の遺蹟を朽ちざらしめんと欲し、遠く
 余に銘を招む。銘曰はく、節は青松より堅く、
 心は白沙より潔し。自ら徳を修むるに非ず。

師を念ずること切きず。晨に遺模を奉り、夕
 べに遺規を守る。千古万古、其の人死せず。

従三位勲二等文学博士三島毅撰す 時に齡
 八十五

大正三年十二月 梧窓湯川亨謹書

(実物の碑文をもとに書き下し文にした)

(3) 現代語訳

山水〔自然の風景〕の靈は（神妙不可思議
 であり）すばらしい。偉人を輩出しなければ、
 偉人を住まわせる〔山水には必ず偉人がいる〕。
 そもそも人は山水と釣り合っているものであ
 る。だから鴨東（鴨川の東）は山紫水明で、
 石川丈山がここに住んでいた。（彼は）仕官
 せず、自らの節操を守り続けた。琵琶湖のさ
 ざ波は見渡す限り翠であって、中江藤樹がこ
 こに住んでいた。（彼の）徳行は人を導き〔感
 化、教化し〕、人々は（彼を）近江の聖人と
 称した。播磨の節宇先生のごとき人もまたそ
 のような（たぐいの）人であることよ。先生
 の諱は美和、字は由之で、節宇と号した。亀
 山氏は姫路藩に代々仕えた家臣である。嘉永
 年間に昌平覺に行き、洛閩の学〔宋の程・朱
 の学問〕を修めたが、必ずしも（それには）
 固執しなかった。学業が成就して藩に帰った。
 侍讀から大監察に昇進した。食祿は百七十石。
 その時、幕末の争乱に出会い、先生は一所懸
 命労力を尽くして藩政を助けた。その功績は
 少なくなかった。やがて明治維新が官に就く
 道に志していた（先生の）思いを断ち切って
 しまった。松原神社の神主となり、そのそば
 で觀海講堂を開き、後進を教授した。遠くか
 らも近くからもやって来て學ぶ者はたいそう
 多かった。先生の生来の資質は、親によく仕
 え兄弟仲良くし、人には恭しくへりくだる。
 愛すべきであって、侮ることはできない。そ
 の教えは徳行によって率先するものであっ
 た。（その結果）人々はみな香りがうつるか

のように穏やかに（先生の）感化を受け、（先生を）播磨の聖人と称した。この地は飾磨郡白浜村に属している。白沙青松によって（この辺り）一帯は覆い尽くされており、煙のような波を隔てて、大小の島々が望まれる。帆船汽船がその間を往来した。漁師の歌声が響き、カモメが飛んでいる。あたかも絵画のようである。先生は仕事の暇な時に、青年や子どもを引き連れて、辺りを散策し、詩歌をそらんじて楽しんだ。三十年ほどの時が経ち、七十八歳で病没した。その履歴と家系や妻子などのことは、瑞松山の墓碑銘が詳しく記している。だから今、改めて書き記すことはしない。ああ、先生は官途に志すことをやめ、自らの節操を守り続けた。また徳行によって人を導いた。人々は（先生を）聖人と称した。そして、その、人〔先生〕が山水とこのように釣り合っていたことは、近時の丈山・藤樹とすることができる。近頃、門人たちが（先生を）追慕してやまず、互いに相談して、碑を建て、その業績を不朽のものにしようと、遠く私に銘を求めてきた。銘に言う。

節は青松より堅く、心は白沙より清い。（先生は）自然と徳を修めたのではない〔懸命に努めて徳を修めたのである〕。先生を尽きることなく懐かしく思う。朝には、（先生の）残された手本を恭しく上にいただき、夕べには、（先生の）残されたきまりを忠実に守る。永遠にその人〔先生〕は死なない〔私たちの心の中に永遠に生き続けている〕。

従三位勲二等文学博士三島毅が撰す 時に
齢八十五

大正三年十二月 梧窓湯川亨が謹しんで書く
なお（ ）内は読むための補いのことばであり、〔 〕内は直前の表現についての注である。

(4) 篆額、撰文及び書について

碑の上部の篆書で書かれた篆額「節宇亀山

先生遺蹟之碑」は股野琢、下の雲平を顕彰した撰文は三島毅、書は湯川亨（梧窓）による。股野琢（藍田）、三島毅（中洲）は共に昌平校時代の雲平の学友である。

股野藍田は、天保9年（1838）に生まれ、大正10年（1921）に没した。多くの碑文を撰し明治後期から大正にかけて日本漢文学の最高権威の一人であり、書家としても名を残している。名は琢。字は子玉、別号邀月桜主人。旧竜野藩士、林復斎に教えを受け明治の功臣。維新後太政官、宮内省の諸官を歴任して東京帝室博物館長になった¹⁾。

三島中洲は、天保元年12月（1830）に生まれ、大正8年5月12日（1919）に没した。享年90歳である。漢学者であり、名は毅、通称は貞一郎、中洲、桐南等と号した。伊予松山藩士の家に生まれ、山田方谷、斎藤拙堂に学び昌平校に入った。後、東京帝国大学教授となり、東宮侍講となった。明治33年文学博士となり、二松学舎を起こして漢学、書道のために尽くした。数多くの碑文を作り、「中洲文稿」等著作がおびただしい。書は気骨稜々たるものであった²⁾。

湯川梧窓は、安政4年（1857）大阪に生まれ、大正13年（1924）68歳で没した。名は亨。幼児期から書を学び、張旭、黄山谷その他、古法帖によって一家をなし、村田海石と並び称された。その著、「三体千字文」「四体千字文」「隸書千字文」「草訣百韻歌」などが有名である³⁾。

かつて江戸昌平校で学んだ学友や全国の学者が観海講堂を訪れており、雲平は明治政府の多くの功臣と交流があった。

3. 遺蹟之碑にみる雲平の思想と人柄

(1) 聖人と称された雲平

「その人（先生）が山水とこのように釣り合っていたことは、当時の丈山・藤樹とすることができる」の一節がある。二人の聖人に

ついて述べる。

石川丈山（1583－1672）は、江戸時代初期の文人で、もとは武士であった。武功を積んだが認められず、武士を捨て、妙心寺に入り、1617（元和3年）頃、知人・林羅山の勧めによって藤原惺窩に師事し、儒学を学んだ。仕官の誘いを多く受けたが断り、清貧を旨として学問に没頭し30数年を過ごし、90歳で死去した。

中江藤樹（1608－1648）は、近江国出身の江戸時代初期の陽明学者で、わが国の陽明学の祖である。15歳で祖父が没し、禄100石を受け継いだ。1634年（寛永11年）27歳の時、母の看病を理由に脱藩して郷里の小川村へ帰り、母に仕えつつ学問と教育に励む。そこで開いた私塾が藤樹書院である。はじめは朱子学に傾倒していたが次第に陽明学の影響を受け、格物致知論を究明するようになる。その説く所は身分の上下をこえた平等思想に特徴があり、武士だけでなく商工人まで広く浸透し「近江聖人」と呼ばれた。代表的な門人として熊沢蕃山、淵岡山、中川謙叔などがある。

この二名と並び称されているのが亀山雲平（1822－1899）である。生きた時代は異なるが名声を求めず清貧を旨として学問に没頭、身分の高低なく多くの人に慕われ、「聖人」と称されたところに共通点がある。

(2) 雲平の学問に対する態度

「洛閩の学〔宋の程・朱の学問〕を修むるも、かならずしも拘はれず」とある。この一節について述べる。

朱子学は、江戸時代寺子屋や藩校で学ばれた⁴⁾。しかし、朱子学と分類されていても実は陽明学的な思想と混合して理解されている場合が多い（後述するが、朱子学と陽明学は根本的に全く異なっている）。例えば、雲平も教えを請い、江戸から明治期にかけて広く読まれた佐藤一斎の「言志四録」は分類上朱

子学となっているが朱子学と陽明学の思想が混在している。次に朱子学と陽明学の違いについて確認する。

1) 朱子学と陽明学

漢の時代（紀元前202年）より四書五経⁵⁾が国教の中枢となった時代が続いたが、5～7世紀に唐の時代にインドから仏教が入り禅となった。唐の時代では道教（禅と老荘思想はほとんど同じ考えで儒教に対して老荘思想を道教と呼んだ）と仏教の禅が全盛となった。国王も禅・道教を宣揚したため、儒教・禅・道教の区別がつかなくなってきた。思想の区別がつかなくなった時代に現れたのが朱子（1130—1200）である。

朱子は、仏教は異教、老荘（道教）は無力、国教は大学、中庸、論語、孟子を中心にした儒教だと主張した。そして、大学、中庸、論語、孟子の儒教の学問を体系づけて再びそれらを中国の国教にのし上げた。朱子の姿勢が表れた言葉を二つ紹介したい。一つは、「致知居敬」である。「致知居敬」とは、一心不乱に知識を深め広め、自分の中に溜め込むことである。二つ目は、「窮理」：知識的によく勉強し、よく読み、一心不乱にその知を深めて事柄の真理をはっきりさせていくことである。朱子は「学ぶ者、これを学ばんのみ」として、四書五経のみを柱として徹底的に倫理学を説き、四書五経を徹底的に読むことを国民教育として徹底させようとした。とにかく四書五経を徹底的に読み、知識を詰め込んだ後に知識に従い行動せよ、というのが朱子の眼目であった。朱子は中庸、論語の言葉を用いて白鹿洞学規という学規を標したが、その後20世紀前半までそれは、中国の基本教育法となっていた。尚、白鹿洞学規については前論文に記載した。

和議は好まず、儒教の義理と仁義に従って、それと異なるものは徹底的に破壊した。その

ため衝突の多い人生をおくった。

一方、陽明学の立場は四書五経を基本としながらも、心明白になる事、自然心に気づきそれを大切に感じる事が重要だと主張する。もし、自然心というものがわからなければ書を読んでも消化不良になってしまうと説く⁶⁾。

朱子と王陽明の根本的理念の違いは「致知」と「致良知」という言葉から汲み取る事ができる。朱子は四書五経の読書を徹底すれば何でもできると説いた（致知）。一方王陽明は、四書五経を読むことは大切であるが、知識だけを蓄積しても食事と同じで、それを消化しなければ生命を損なうこともあると論じた。また、良知は読書だけで培われるものではないとして、「心明白に」なること、人間に内在する自然知に気づく事が重要とした。良知とは、本来誰から教わるでもなく自分が会得しているものを指す。たとえば呼吸は眠っている間もやむことなく我々の命を保ってくれている。歩くこともまた、左右、と考えなくても体が自然に動いてくれる。これらのことを全て良知というのである。その働きに気づき、感謝し、すばらしい輝きというものを自覚して生きることが重要としたのである（「あんじんりゅうめい安心立命」）⁷⁾。

また、王陽明は禁欲的な朱子と異なり、ひたすら楽しむ事はすばらしいと喝破する。寝食を忘れるほどに没頭できるという事は、自分に内在する力を発揮しているという事で、楽しむ力こそ「良知」と述べている。朱子とは異なり、さまざまな事象を尋討し、知識と理屈だけで評価評論すること、知識や常識的分別で尋討し続けることには幸福の根本はないと説いた。

雲平が教育方針として据えた第一の柱は、「発憤しては食を忘れ、楽しんで憂いを忘れ、老いの将に至らんとするを知らず」、第二の柱は朱子学、第三の柱は、「文林・詩壇に遊ぶ」第四の柱は「國家一旦ノ用ヲ待ツ」「國爾忘家」自覚と実践であったが、第一と

第三の柱に位置づけられた「楽しむ」ということ、「文林・詩壇に遊ぶ」という部分は禁欲的で四書五経しか読むべからずとした朱子学とは矛盾する立場にある。つまり、雲平は朱子学だけに埋没するのではなく、陽明学や他の学問からも良い部分を取り入れた教育を実践していたということである。

雲平が洛閩の学のみ固執しなかったのは、理想だけでは物事は円滑に運ばれないこと、人間には幅があり、質を保った柔軟な思考が人を救い国を保つと考えていた所以であろうと思われる。

絵画のような風光明媚な土地を青年や子どもを引き連れて散策する事を常とし、詩作をも重んじ、魂の遊びをも重視していたというところに、雲平の学問に裏打ちされた懐の広さと柔軟性を見ることができよう。

2) 松原八幡神社宮司 亀山節夫の言

現在、雲平の玄孫であり、白浜の松原八幡神社宮司の亀山節夫氏による雲平の教育観についての言をここに紹介する。（平成19年11月21日筆者への便りより）

「国事に尽くして家を忘る」の言は雲平が実感として残した言葉であり、難事に役立つ人材がいかに必要かを身を持って痛感したことだったのだろうと思います。この印（國爾忘家）（一旦用）は今も残っていてよく関防印として使われていたようです。雲平の本心は自分の修めた学問を他人に伝えたいということにあり、後半は教育者に徹したと思います。それは恩師である角田心蔵先生や佐藤一斎先生の恩に報いるためでもあったと思います。河合寸翁の創設した仁寿山学は雲平の目標であり、当時の観海講堂からは仁寿山が望めたと思います。観海講堂の開校の際に長三洲が来学し書かれた扁額は講堂

の玄関に閉校まで掲げられていました。

ある人物が、少しでも塾生を増やす為、当時人気のあった蘭学や算術を教科に加えてはどうかと進言したところ言下に「私が教えている限り漢学一本でゆく」と言い切ったそうです。学問とは正しい心、人や物を尊ぶ心を養うのが第一義と決めていたからだと思います。

精神性を大切にした雲平の教育にかけた思いが表れている。

(3) 明治維新と雲平

「やがて明治維新が官に就く道に志していた（先生の）思いを断ち切ってしまった」とある。鎖国から開国へ、江戸時代から明治時代に動く激動の間に雲平は多くの死を目の当たりにしている。雲平が江戸にいたころには、ペリーの来航（1853 嘉永6年）があった。尊王攘夷運動に対する大弾圧、安政の大獄（1858 安政5年）、桜田門外の変（1860 万延元年）が立て続けに起こり志半ばにした多くの人命が失われた。1864年（元治元年）、雲平43歳時には、姫路藩でも勤皇派に対して弾圧を加える甲子の獄がおり、家老高須隼人によって謹皇派とされるものが次々と逮捕され、罷免、閉門、蟄居など厳しい処分が下された。この時、雲平は大目付として深く関わっている。それぞれの信念により謹皇・佐幕の二派に別れ、多くの藩士が、刑死していく真只中にいた雲平の苦悩はいかばかりであっただろうか。

1868年（慶応4年／明治元年）1月3日には、鳥羽伏見の戦いが起こり、徳川軍は大敗し、雲平の長男亀山丈助方正も惨敗し帰還した。

幕末、国を思う数知れぬ有能な武士が、犠牲となった。農民や町民も例外ではない。このように非常に多くの犠牲者の上にある新時

代の政府に仕えることに心の痛みを禁じえなかったのかもしれない。また、若き頃より徳川方の歴代の姫路藩主に仕え、その使命を全うした雲平はその主を守り明治政府に仕えることを良しとしなかったとも考えられる。雲平の仕えた姫路藩主は酒井忠宝16歳、酒井忠顕18歳、酒井忠績34歳、酒井忠悖29歳、酒井忠邦15歳と歴代若くして相続している。その若い君主に誠心誠意仕えた雲平の気持ちは察するにあまりある。

その後、松原神社の祠宮となり、神社の記録、宝物等の調査を行い、宮庁に報告する等、堅実にその役割を果たした。また、輩出された弟子には、維新後の日本の礎を築いた人物が多く、「國家一旦の用に役立つ人材」の養成を実行した。雲平の国を思う気持ちは少しもそがれた様子はない。

高弟の一人でこの碑の建立に尽力した一人である金井利信は、姫路師範学校の教授であり、子息は金井寅之助、松蔭大学教授であった。高弟の一人である吉田豊吉は、観海講堂で学び、卒業後松原村で商業を営んだ。子息、吉田豊信は内務省諸官を経て兵庫県出納長、姫路市長となった。学生時代は勉強部屋に亀山雲平の書を掲げ、この書を見ては奮起したとのことである。同じく発起人である高弟、岡田重成は、白浜小学校の首席で後に粟生小学校の教員となり、松原村役場に勤務した。白浜聖人と讃えられた人物である。重成の次男である岡田武彦は九州大学名誉教授文学博士で中国研究の孔子、王陽明分野における世界的権威で日本有数の大儒学者であった。外国の大学教授もその教えを受けており、著書の一部は英語などに翻訳され外国でも出版されている。

雲平の薫陶を受けた高弟とその子息に雲平の思想や生き方が継承されている一端である。維新後雲平は学者、教育者として人生の後半

を生き抜いた。

(4) 雲平と徳

「徳行人を化（みちび）き」「徳行を以て率先す」「自ら徳を修むるに非ず」と徳という言葉が重なり使われている。現代に生きるわれわれは徳という言葉が日常から消し去り意識することもなくなってしまった。徳とはいかなるものか、徳ある人物とはどういう人物であったのか、雲平の生き方から学びたい。

徳とは善き行いをする性格、品性であり人に感化を与える人格の力である⁸⁾。徳のある人物とは、私利私欲に打ち勝ち、常に公を考え、いかなる環境でも恭・寛・信・敏・恵の五つを行い、慈愛、知識、誠実、正直さ、勇氣、剛毅を備えた人物を指す⁹⁾。「徳は得なり」ともいい、徳ある人は周りに得を与えることができる、心広く豊かな人間のことである。論語の一説である、「子曰く、徳は孤ならず、必ず隣有り（里仁四一二十五）（徳ある人は独りにならない、必ず其の心に感じて人が集まってくる）」は、門弟3,000人といわれた雲平を指しているように思われる。

『遺芳纂録』には、大西樞太郎の追想として雲平の様子が述懐されている¹⁰⁾。姫路藩で勤皇派の処罰を決める際（甲子の獄）、全員死罪に決しようという厳しい雰囲気の中、雲平は次のように主張した。

先生正ヲ守リテ動カズ罪ノ輕重ヲ論セズシテ刑ニ処スルハ妥当ナラズ況シテ親シク手ヲ下サバリシモノモ齊シク死刑ニ処スルハ如何カトテ審々諤々トシテ論争セラレタレバ有司モ遂ニ其言ニ伏シタリ

雲平は、佐幕、勤皇と国論が二分される中、冷静に公平に判断をくだそうとした。姫路藩と幕府の深い関わりから幕府を守るべき立場

ではあったが、勤皇派にも理解を持ちながらその場の雰囲気や気分流されることなく、常に正を守り姫路藩のために主君に対する忠誠をもって職責を果たそうとしたのである。

また、雲平の高弟で観海講堂の教授兼塾長であった金井利信は、「利信の先師に従ふや、頗る久し明治十年の春初めて、東脩の礼を行うてより、爾後二十年の長日月にして、其間懇到なる教訓化育に浴せしこと能く筆舌の盡す所にあらざるなり。後遂に擢んでられて、其家塾観海講堂の塾長を命ぜられるなど、其他提指尊数ふるに遑あらず、思ふて茲に至れば、其恩実にとらちねの君にも劣らざるなり。嗚呼此の恩何を以て報ゆるを知る。況んや此の洪大なる恩徳をや（後略）」¹¹⁾と雲平の恩徳を記している。

当時雲平と親交のあった白浜の米沢菊次（發起人の一人）は雲平を「質素儉約を旨とし服装も木綿で満足し、絹などの甘美に流れず己をいさめていた。金は親戚や旧知の友、塾生の生活に目を配り帰省の旅費を助けるなど豊かでなくとも他者を思いやっていた」¹²⁾と紹介している。

門弟3,000人といわれ、播磨各地から雲平を慕って教えを請う者が列をなした。このように、人々は、香りがうつるかのようによやかに雲平の感化を受け、雲平を播磨の聖人と称えたのである。門人たちが雲平を追慕して止まず、互いに相談してその業績を不朽のものにしようとして、この碑が建立された。

「節は青松より堅く、心は白沙より清い。師を尽きることなく懐かしく思う。朝には、（先生の）残された手本を恭しく上にいただき、夕べには、（先生の）残されたきまりを忠実に守る。永遠にその人〔先生〕は死なない。」の文言には心からの敬意と、雲平の偉大さが凝縮されている。雲平は徳の人であった。

おわりに

節宇亀山先生遺蹟之碑は、大正3年に建立されたとみなされていたが、資料により、除幕式が挙行されたのは、大正4年（1815）7月6日であることが明らかになった。雲平没後16年にして門人により節宇亀山先生遺蹟之碑が建立されたのである。今年で93年になる。股野琢による篆額の一部である「節」が欠落し判読が難しくなっているのは、遺憾である。早急な修復が望まれる。遺蹟之碑には弟子を愛し導いた雲平の、そして永遠に師と仰いだ弟子の深い思いが刻まれている。

江戸末期、雲平は多くの尊い命が失われる修羅場を武士として生き抜いた。主君を支え、主君の家名存続に渾身の力を注いだ。ひとつの時代を終えた雲平は、明治になり仕官せず、時代が動く中、自らの節操を守り続けた。学者、教育者として人生の後半を生き抜いた雲平は徳行により人を導いた徳の人であった。徳という言葉が死語ともいえる現代において、雲平の業績を辿ることは意義のあることである。

雲平は朱子学のみに固執せず、陽明学や他の学問も取り入れ、柔軟な教育を行った。詩作等、創造の世界に心を遊ばせることも大切にした。実学より漢学を通して、支えとなる精神性を大切にする教育を心掛けた。今日にも必要な教育理念である。一例をあげたが、雲平没後、高弟の子息が「国家一旦の用に役立つ人材」となり、それぞれの立場で分を果たしたことは、雲平の教育理念の確かさを如実にものがたる。名を残さずとも、それぞれの立場で分を果たした弟子は多くいたであろう。中島久吉もその一人であろう。

徳を積むこと、師弟のきずな、詩作を通して心を遊ばせ心を育てる教育、今日もう一度考えねばならぬことであろう。

今回は、節宇亀山先生遺蹟之碑に関する中

島家所蔵の他の資料の検証を行う。

前稿及び本稿を執筆するにあたり、亀山節宇顕彰会会長長野哲氏、姫路木鶏クラブ会長三木英一氏に多大な御協力を賜りましたことをここにお礼申し上げます。碑文の解説は、姫路西高等学校教諭岩崎壽光氏にご協力を賜りました。心よりお礼申し上げます。

註・引用・参考文献

- 1) 飯島春敬編：書道辞典．761，東京堂出版 東京，1975
- 2) 同掲 767
- 3) 同掲 819
- 4) 武家は朱子学を学び、寺子屋で朱子学を学習し、町人・農民は陽明学的な生き方を学んだ人が多かった。
- 5) 儒教の經典で重要な9種の書物。四書は「大学」「中庸」「論語」「孟子」、五經は「詩経」「書経」「礼記」「易経」「春秋」である。
- 6) 自分に内在する自然心の本体1つが見性できれば難解な表現の奥底にある主題がよくわかるようになる。
- 7) 堺野勝雄：陽明学と禅のこころ。到知出版、東京、2003
- 8) 岩越豊雄：『論語』百章。到知出版社、東京、2008
- 9) 情に流されないほどに慈愛を好み、知識を好み、軽信や過信という弊害を除しながら誠実を好み、バランスを保った剛毅をこのむこと。徳が弊害に陥らないようにするためには、先人の行為や業績をしっかりと学んで独断に陥らないようにすることが大切である。
佐久協：高校生が感動した論語．46，祥伝社、祥伝社新書、東京、2006
- 10) 播磨聖人 亀山雲平顕彰会会報：青松白沙．1991年6月

11) 同掲

12) 播磨聖人 亀山雲平顕彰会会報：青松白沙．1992年11月

亀山雲平年表

西暦	年号	年齢	事 跡	社 会 情 勢	仕えた藩主	相続年齢
1822	文政 5 年	1	1 月20日 姫路藩士亀山百之の次男として 姫路に誕生		酒井 忠学	28
1825	文政 8 年	4		異国船打払令		
1832	天保 3 年	11	姫路藩校好古堂で藩儒角田心臓に師事			
1835	天保 6 年	14				
1837	天保 8 年	16		大塩平八郎の乱		
1839	天保10年	18	4 月16日 偶日方句続手伝いを拝命 7 月 5 日 上記本役を拝命	蕃社の獄		
1841	天保12年	20	書物預役兼務を拝命	天保の改革	酒井 忠宝	16
1842	天保13年	21	8 月 好古寮肝煎を拝命			
1843	天保14年	22	2 月26日 指南手伝いを拝命 9 月30日 兄剛毅病没。亀山家を継ぐ 11月 焼火番を拝命 12月23日 書物預役を免ぜられる			
1844	弘化元年	23				
1846	弘化 3 年	25	9 月22日 好古寮肝煎を免ぜられる 12月 6 日 好古堂教授となる			
1850	嘉永 3 年	29	抜擢され江戸昌平坂学問所に寄宿する			
1851	嘉永 4 年	30	江戸昌平坂学問所に入り、日本有数の大学者 佐藤一斎に師事		酒井 忠顕	18
1853	嘉永 6 年	32	2 月26日 昌平坂学問所書生寮詩文掛を拝命 6 月 8 日 中小姓を拝命 12月 1 日 昌平坂学問所を退学	ペリー浦賀来航 (6 月 6 日)		
1855	安政 2 年	34	6 月 1 日 藩校 好古堂の教授となる			
1856	安政 3 年	35	7 月11日 江戸在番を拝命			
1858	安政 5 年	37	在姫路（妻と母病状悪化 死去？）	安政の大獄		
1860	万延元年	39		桜田門外の変	酒井 忠績	34
1861	文久元年	40	11月 5 日 藩主より抜擢され大監察の大役 に就任、大目付を拝命			
1862	文久 2 年	41		坂下門外の変		
1863	文久 3 年	42			酒井 忠悖	29
1864	元治元年	43		長州征伐・1 回、姫路藩 甲子の獄(12月26日)		
1865	慶応元年	44		長州征伐・2 回		
1867	慶応 3 年	46		大政奉還、王政復古の 大号令		
1868	慶応 4 年 明治元年	47	1 月13日 備前軍使応接役を拝命 大監察 として備前軍との交渉係 1 月17日 姫路城明け渡し 6 月14日 絵図文御番を拝命 (5 月13日 失脚？) 8 月 病のため役職を辞す	鳥羽伏見の戦い (1 月 3 日～1 月 6 日) 9 月 8 日 明治に改元 戊辰の獄	5 月 酒井 忠邦	15

播磨聖人 亀山雲平－節宇亀山先生遺蹟之碑にみる雲平の思想と人柄－

西暦	年号	年齢	事 跡	社 会 情 勢
1869	明治2年	48	3月 総社門御番方を拝命	藩籍奉還
1871	明治4年	50	1月28日 長男亨に家督を譲り隠居して恭吉から雲平へと名を改める。	廃藩置県
1872	明治5年	51		学制を發布
1873	明治6年 7月	52	7月23日 飾東郡松原村の松原八幡神社の祠官となり同神社の境内地に「久敬舎」設立 8月17日 飾磨県御雇いにより地誌提要取調べをする 12月18日 大教正有馬頼咸より教導職9級試補を申し付けられる	
1877	明治10年	56		西南の戦争
1878	明治11年	57	11月28日 播磨国神道事務分局副長担任となる	
1879	明治12年	58		(酒井忠邦死亡 享年26歳)
1881	明治14年	60	8月13日 内務省より権大講義に補せられる	
1884	明治17年	63	9月17日 一等仮試験合格証を兵庫県皇典講究分所より下付される 10月1日 塾舎を建築、観海講堂落成	
1885	明治18年	64	9月20日 神道管長稲葉正邦より大講義に補せられる 10月16日 飾東郡祠官掌副取締りとなる 10月19日 権少教正になる	
1887	明治20年	66	6月16日 神道姫路分極内局顧問となる 12月26日 少教正になる	
1888	明治21年	67	11月23日 飾東郡祠官掌取締り担任となる	
1889	明治22年	68		憲法發布
1890	明治23年	69	8月12日 兵庫県皇典講究分所受け持ち委員となる	教育勅語發布
1892	明治25年	71	中島久吉（17歳）への葉書（2月6日）	
1893	明治26年	72	中島久吉（18歳）への葉書 8月31日、9月17日	
1894	明治27年	73		日清戦争
1895	明治28年	74	6月10日 午後9時妻西松氏死去 10月28日 長男亨死去 中島久吉（20歳）への葉書 2月5日、6月11日、7月4日	
1896	明治29年	75	中島久吉（21歳）への葉書2月1日	
1897	明治30年	76	中島正蔵（20歳）への葉書9月8日	
1898	明治31年	77	1月1日 神職監理局姫路市飾磨郡分局長となる 1月11日 姫路神社及び射楯兵主神社社司を兼務する	
1899	明治32年	78	4月26日 射楯兵主神社社司兼務を免じられる 5月6日 観海講堂において病のため死去 姫路瑞松山景福寺に葬られる	
1900	明治33年		10月 観海講堂閉校	
1915	大正4年		7月6日 節宇亀山先生遺蹟之碑除幕式挙行	

注）年齢は全て数え年で記載。